

「どこから来て、どこへ行くのか」

——ジョン・ウエスレー（一七〇三—九一）の場合——」(III)

佐々木 勝彦

エキュメニカルな神学者ウエスレー

清水光雄著『ウエスレーの救済論』の最終章（第五章）の表題は「エキュメニカルな神学者ウエスレー」となっており、その冒頭でこう述べています。「国教会の中庸の伝統で豊かに養われたウエスレーは、プロテスタントとカトリックとの統合に止まらず、西方と東方の二重性にしっかりと立ったエキュメニカルな神学者であることを述べてきた。ウエスレーはプロテスタントか、カトリックかの議論を越え、西方的か、東方的かの議論を越えて、あらゆる二者択一を越え、相矛盾する立場の共生を真に求め続けたエキュメニカルな神学者であった」（一六一頁）と。そして彼の独特な「二重性」の内容を具体的に次のようにまとめています。これは、ウエスレーの神学の内容を理解する上で大変有益な要約

です。一つの有力な仮説として参照してみてください。きっと役立つはずです。

なお、ここで用いられている略記号の意味は以下のとおりです。

P——「プロテスタント的」、C——「カトリック的」、O——「東方的」。

① ウエスレーが、Pであって、C、Oではない点。

「原罪の教理、全堕落の強調と、信仰義認、特に確証の教理、直接的・霊的体験としての信仰概念があり、これはウエスレーの中期の中心的主題で、後期にも継承」された。

② ウエスレーが、C、Oであって、Pではない点。

「罪人なる人間の神の恵みに対する応答の主張、人間の普遍的救いの可能性の主張、罪人なる人間による良き業の承認、あるいは、聖なる成長・完全、愛によって働く信仰等の考えである。こ

の要素はウエスレーの中期にも流れているが、初期、特に後期にも最も展開される。」

③ ウエスレーが、P、Cであって、Oではない点。

「原罪による罪責や、満足説、刑罰代償説に表われる法的概念の強調で、これも中期の中心的テーマで、後期にも継承された。」

④ ウエスレーが、Oであって、P、Cではない点。

「自然と恵みとの二元論の否定、神と人間との参与による治癒的救いの概念の強調である。そこでは、未来に開かれた宇宙的世界にも焦点が合わされ、この救済論の背後に、受肉・再統合の教理、復活・昇天・王としてのキリスト論、つまり、完結したキリスト論ではない未完のキリスト論の主張がある。ウエスレーは、これらの考えを主として後期に展開した。」

⑤ ウエスレーが、Oであって、Cではない点。

「非創造的恵み理解、つまり、カトリックの注入された恵み、この恵みに基づいた功績という、創造の恵みではない非創造の恵みの主張である。」

しかし著者によると、ウエスレーの思想は真にエキュメニカルであると言われるためには、以上の五つの視点のほかに、それはPでもあり、Cでもあり、Oでもある、という側面が指摘されなければなりません。彼はこの問題を、「のみ(断絶)」の立場と「と

(連続)」の立場がウエスレーの神学において統合されているケースとして捉え直し、『ウエスレーの救済論』の第五章・第一節では「義認と聖化」について、さらに第二節では「キリスト者の完全」について、詳しく論じています。

以上、メモ風に、清水光雄氏の諸著作から、筆者の関心の範囲で「ウエスレー神学」の概要を紹介してきました。残されたテーマも多く、この解説のいづれも説明不足であることは否めませんが、今後、自ら、ウエスレーの生涯と神学を跡づけるきっかけになれば幸いです。

追録

昨年九月、本稿の原稿を提出した際には、この後に「残された課題」と「注」が続き、本稿はすでに完結していました。ところが、編集方針の恣意的な変更により、一括して掲載されると考えていた原稿が、三つに分割されることになりました。大変読みにくくなったことをお詫び申し上げます。

しかもこの三月に、清水光雄著『ウエスレー思想と近代——神学・科学・哲学に問う』（教文館）という四百ページを超える大著が刊行され、本稿にその内容を反映させるべきかどうかという新たな問題が生まれました。しかしすでにその大部分が印刷され

ていることを考え、原稿には手を加えず、「追録」の形で、その目次と、本稿の理解に資すると思われる範囲で、その内容の一部を紹介することにしました。したがって以下の引用句は、著者の本来意図した文脈と関係なく選択されています。その点を留意の上、参照してください。また引用文は、読みやすくするために、注の場合と同様に、主に句読点など、その一部に修正が加えられています。

目次

はじめに。「第一章 西方の神学と東方の霊性」、第一節・一九八〇年代前後のウエスレー研究、第二節・神の像と先行の恵み、第三節・神の恵みと人間の応答。「第二章 ウエスレーの自然科学思想」、第一節・ウエスレーと理性、第二節・ウエスレーと自然科学。「第三章 ウエスレーと哲学的認識論」、第一節・ロツクの認識論、第二節・ブラウンの認識論、第三節・マルブランシュ、第四節・ウエスレー思想の特質。

① アルダスゲイト体験

「筆者は、ウエスレーのアルダスゲイト体験は聖霊体験（啓示体験「神的啓示」と人間の確証体験（心理的概念で、実存的体験ではない「知覚的認識」）が同時に与えられる二重性の出来事

（存在論的神学）で、この二重性の理解がウエスレー自身の解釈した聖霊の証の教理内容だと本書で述べます。あなたが救われ、神の子とされることを伝える聖霊の証と共に、この証を愛し・喜び・平和の内的知覚・感性的自覚による確証体験で、人間は神を知るのです（主観・客観構造を超えたところで成立する知・存在論的神学）」（はじめに」一二頁）。

「筆者の語る聖霊による感性的認識論は、神の言葉と人間の心性性による、両者の同時的な出会いの出来事であることを本書で語ります」（はじめに」一三頁）。

② 恩師

「筆者には、青山学院時代の野呂と小田垣雅也の二人の恩師がいます」（はじめに」一三頁）。

③ 神の像

「東方特有の教えによると、神の像（エイコーン）として創造された人間は、神との同一本質（ホモウーシオス）ではなく、神に類似（ホモイオーシス）することが求められます。この東方固有な神の像と神の類似の一对概念は、ウエスレーの「自然的神の像（natural image of God……神を知り・愛し・従う知的被造物としての人間）」と「道徳的神の像（moral image of God……実際に神を知り、微動だにせず神を愛し、絶えず神に従う人間）」に対応し、墮落で人間は自然的神の像を損ない（人間の基本的諸

機能「である」悟性・意志・自由の腐敗)、神の道德的像・神の類似性を失ってしまったのです。……前者「神の像」は、人間が普遍的に神の生命に応答できる潜在性を意味しますが、後者「神の類似性」は……この潜在性を実現することです。この実現は(しばしば神化と呼ばれます)……人間の理想目標「は」アダムの原初的狀態を実現すること、つまり、人間が神の像に創造され、神の類似性に生きる原初的狀態を実現することです。……神化はウエスレーの「完全」理解と同意義だと言われます」(「第一章」四一頁以下)。

④ 終末論

「一八九〇年以降の研究者は、前期思想に中・後期に至る全体の枠組みの概念(神の像理解など)があり、前期と中期にウエスレー思想の類似的要素(救いの現在性など)が、中期と後期にはさらなる相違(全被造物の終末的宇宙の変容など)があると述べます。つまり、ウエスレーは、中期で、個人の救いの現在性を中心に、静的な現在終末論(他の人間や被造物の救いと無関係に、自分だけの救いを求める終末論)を展開しますが、後期では、東方思想の、全被造物の宇宙の変容を訴えたと言われます。その結果、ウエスレー神学は、「標準説教集」ではなく、一五一の全生涯の説教で解釈され、一九八〇年代以降の研究者は、ウエスレーが独特な神学思想を展開した後期思想を重視します。……「神の

像」はウエスレーの生涯に一貫するテーマですが、このテーマは、中期と同様前期でも、個人の救いの現在性を中心にする静的な現在終末論です。しかし後期では、個人・社会・全被造物の変容による成長・発展を通して、創造全体の贖い「が」完成「される」という未来終末論で神の像が展開されます」(「第一章」一二二頁)。

「では、この宇宙的終末理解で動物はどのように理解されたのでしょうか。永遠の世界が純粹に靈的狀態と理解される場合、物質的身体の動物はそこに存在できません。復活時に人間は再肉体化されますが、その肉体は栄光化され、靈化された身体で、物質的な身体的存在ではなく、靈的存在として人間は神を賛美します。そうであれば、神を賛美する共同体の中に動物はいません。

しかしパラダイスが前期・中期と異なり、純粹に靈的な世界ではなく、また、中間状態「死者が復活を待つ状態」から明確に区別され、宇宙的再創造・新創造の世界から理解される場合、この世界に物質的なものが存在できます。……また、動物の悟性、意志も同様で、人間が天使のレベルまで高められるように、動物も人間の知性、意志のレベルまであらゆる段階を通じて高められ、完全に至ります。こうして人間も他の被造物も、原初の創造時に持っていたものより、新しい創造「において」はるかに偉大な能力と祝福をもつことが、一七八一年の説教「全被造物の解放」(BE, 2: 437-450)で詳しく語られます。このように被造物全体の回

復という、終末的神の活動は全てのものを原初の状態に戻す以上の働きで、この神のみ業に全被造物が参与できるのです」(「第一章」一一七頁以下)。

⑤ ウェスレー神学の骨格

「神が人間を愛すること(神の恵み)と、この恵みに人間が応答すること(人間の応答)がウェスレー神学の骨格です。神と人間との関係は、相互的に「応答する恵み」あるいは「協調する恵み」です」(「第一章」一五三頁)。

⑥ 愛の一元論と信仰の一元論

「アダムが創造された時、創造当初より存在したのは、律法という形で人間の心に与えられた愛です。永遠の昔より人間は愛を成就すべきなのです。愛は永遠から永遠にわたり倫理の原理です。信仰が生まれたのは、アダムが罪を犯したためであり、本来、信仰は不要でした。したがって、信仰の唯一の目標は愛の律法を成就することで、愛の成就ということから離れた信仰はそれ自体無価値なものと考えられました。この点で、愛の成就を信仰の本質と捉えるウェスレーは、国教会の考えと一致し、宗教改革者の考え方と異なり、「これを」イスラム教徒などの異教徒の救いの根拠にします。

ウェスレーは信仰と愛の関係を密接不離な関係と捉え、この関係を論理的なものともみなします。原因が結果を含むように、良き

働きのない信仰は存在しません。そして反対に、信仰の喪失は、論理的必然性として愛の働きの喪失になります。そして実を結ばない信仰は、人間を救う信仰ではないのです(BE, 2: 207, Works, 8: 276, 285)。ウェスレーの世界は愛の一元論です(創造

時のアダムが信仰を必要としなかったように、異教徒の救いの根拠をウェスレーは愛に置く)。神の本質的性格を愛と捉えるウェスレーは、生きとし生けるもののすべての関係を愛に置き、愛によって世界が秩序づけられます。愛はあらゆる関係を正しく秩序づける根源的働きです。ウェスレーの世界観はこの愛で形成され、信仰の完成は愛の成就にあります。福音は律法の完成であると強調するのは、ケンブリッジ学派、ロック、ブラウンなどを含める国教会の伝統であり、この伝統にウェスレーは立ち、合理主義的キリスト教理解、つまり、啓蒙主義精神につながる理性的、倫理的知識形態を一つの宗教的知識として尊重したのです。……倫理的、共同体的知(愛の道具としての信仰理解)と、個的、実存的知(信仰の道具としての愛の理解)という二種類の知を主張するウェスレーでした。個的実存思考の形態では信仰の一元論、倫理的、共同体的思考形態の世界では愛の一元論でした」(「第二章」一八九頁以下)。

⑦ 三位一体論

「三位一体の教理を理解する場合、日常生活で明白な概念をも

つ父、子、霊の類比論から理解されるべきで、三位一体の神ご自身の内で、この三つの位格が実際にどのように存在するのかを問うべきではありません。「このような三位一体と同じような関係が、人間の良く知っている日常生活の中で見いだされないならば、三位一体の教理を……理解することは全然でき「ません」」(Sujvey, 5: 214f, Procedure, 302f)。それゆえウエスレーは、体験できる宗教的次元から離れ、人間の知的限界を超える哲学的な三位一体の説明を不要とし、三位一体、人格という用語を使用することさえ強制してはいけいと言います。これらの用語を使用しなかつたセルヴェトスを火刑にしたカルヴァンを、ウエスレーは批判します」(BE, 2: 376-379)〔第三章〕(三三六頁)。

残された課題

① 第二章で紹介した大木英夫著『ピューリタン』の内容をさらに深く掘り下げたい方には、大木英夫著『ピューリタニズムの倫理思想』(新教出版社、一九六六年)をお勧めします。これは「キリスト教社会倫理学」の建設という組織的研究への歴史的序説」として構想された専門書です。実際に取り組むにはかなりの覚悟が要求されますが、その努力が裏切られることは決してありません。その発想とスケールの大きさに圧倒されるだけでなく、多くの新たな問題意識を喚起されるはずで、例えばその「終章」キ

リスト教社会倫理の可能性」を読むならば、著者の考える「神学」とその目指す「キリスト教社会倫理」がどのようなものであるかが、そしていずれも「日本プロテスタンティズム」の「現代的有効性」と「現代的妥当性」を追求していることが分かります。この大胆かつ詳細な研究から引き出された結論は、「日本プロテスタンティズムの歴史的主体性の確立は、この「契約神学」の回復によることは否定できないであろう」(四一三頁)ということでした。したがって著者の言う「契約神学」の内容をさらに丁寧に読み解き、その歴史的かつ現代的意味を検討する必要があるとす。

② 前項で紹介した「終章」の結びの部分は、こうなっています。「近代化とは避けることのできない歴史的過程である。ただそれを正常化し推進するしかできない。そのためには、近代化の秘密を明白に捉えた精神が必要である。その精神が今日の急激な社会変化の激動におさまることなく取り組むことができるのである。近代化の原初的過程と密接に関わりをもっていた宗教は、ピューリタンのキリスト教である。その最初において《宗教的》な形成であったものが、今日においてそれ以外の仕方ではなされることはありえない。今日においても根底からの近代化は、依然として宗教的な形成でなければならないであろう。近代化の過程は、近代のエートスを基盤とした世界共同体の完成に至るまで終

結しないのである」(四二四頁)。

これは、今から半世紀も前に発せられた言葉です。それは古くなるどころか、歴史の行く末を見通しているかのような発言です。この五十年の間に、冷戦構造は解体され、イスラム圏の混乱はそのまま欧米社会の混乱と保守主義化をもたらしています。アジアでは今なお軍事力によってすべてを解決しようとの幻想と、格差社会を当然と言い切る欲望資本主義が支配しています。したがって私たちは、この状況においてなお、「ピューリタニズムの宗教的倫理的特質」の回復は、問題の真の解決に通じるのか?と問わなければなりません。難問の一つは、世界の宗教人口の三分の一を超えるイスラム圏の歴史には、宗教改革と三十年戦争のような深刻な宗教戦争の体験が含まれていなく、その歴史の内側から政教分離の要請やデモクラシーの要求が現れなかったことです。ただし、現代の欧米諸国の、ピューリタニズムの系譜に属する諸教会の経験は、移民や難民の問題に直接ふれることの少ない日本のキリスト教会にとって、極めて有益な歴史的参考資料となるはずです。

③ 『ピューリタン』によると、アングリカニズムの三本柱は「ナシオナリズム、アブソリュティズム(国王絶対主義)、受動的服従の倫理」(一六〇頁)であり、このアングリカニズムと対峙しつつ、宗教改革を推し進めようとしたのがピューリタニズムです。

したがって本稿の第三章の内容も、この三本柱を強く意識しつつ、展開する方法もありました。しかし今回はあえて、ウエスレーの「社会倫理思想」ではなく「神学の内容」に焦点を合わせました。これは、まず、今日の学生の偏りがちな関心を補おうとしたためです。ピューリタン革命以後のアングリカニズムにおいて、あの「三本柱」はどのように変化し、それとの関連で、ピューリタンの末裔たちはどのような立場に置かれたのか、さらにウエスレーにとって彼らはどういう存在に映ったのかといった問題は、別の機会に取り上げたいと考えています。

④ ウエスレーが亡くなると、英国のメソジストたちは間もなく英国国教会から独立する道を選び、独自の歩みを始めました。なぜ彼らはそうしたのでしょいか。このように問わざるをえないのは、彼らは、ウエスレーがどのような思いをもって、英国国教会に留まり続けようとしたのかを知っていたはずだからです。その場合、あの三本柱に対する評価はどのような変化したのでしょうか。あるいはまったく変化しなかったのでしょうか。すでに宗教寛容令が發布されていたとはいえ、アングリカニズムが主流であることに変わりはありませんでした。彼らは、政教分離の道を選んだアメリカのメソジズムをどのようにみていたのでしょうか。

⑤ 大木氏によると、ルターの言う「キリスト者の自由」は、ピューリタン革命を通してはじめて社会的現実になりました、つ

まりそこには「ルター的人格意識」から「ピューリタンの権利意識」への「外化」(『ピューリタニズムの倫理思想』、三二頁)が起りました。そして、ここに生まれた人権意識によって初めて、「キリスト者の自由」が「愛を媒介として、奉仕への自由」と読み変えられるときに陥りがちな弱点、すなわちあの「受動的服従の倫理」にからめとられる危険を回避することができるようになります。ウエスレーの場合、それはどうだったのでしょうか。たしかにウエスレーの神学においても、「人格の問題」が重視されていたことは間違いありません。しかしそれは「人権の意識」へと「外化」されていたでしょうか。これは、メソジスト会員相互の内面的成長と現実問題を解決するために、ウエスレーが様々な組織を考案し、その運営に苦心したことを考えると、どうしても問わざるをえない問題です。組織の責任ある地位に立つ人間は、必ず「力」と「人格」の緊張関係から生ずる「痛み」に苦しむからです。ここには、彼は教会をどのような組織として理解していたのか、という神学的な問題も隠れています。

⑥ 筆者の「ウエスレーへの直接的な関心」は、本稿のⅢ章「はじめに」において述べたように、学生からの質問に答えざるを得なかった、という現実から出発しています。その質問の多くは、『民衆と共に歩んだウエスレー』に関するものではなく、「聖霊によるバプテスマ」に関するものでした。質問者の多くは、いわゆる

「ペンテコステ派」の教会に属する学生たちでした。筆者は彼らにまず、その教会の歴史を語ってくれるように依頼しましたが、そのルーツを客観的に報告してくれた学生はほとんどいませんでした。指導者に聴いてもよく分からないとの返事でした。この不思議な現実にとまどい、これに応えるには、まずウエスレーから始めるしかない、との「勘」からスタートせざるをえませんでした。

この手さぐりの状態から抜け出す道を示唆してくれたのは、清水光雄著『メソジストって、何ですか』の第三節「聖霊のバプテスマ」でした。ここには、ウエスレー自身が、フレッチャー——カルヴィニズムとの論争時における共闘者——の「バプテスマ体験」(二七七年)の強調に困惑したこと、そしてやがて聖霊のバプテスマを求めるペンテコステ運動をめぐり「ウエスレーと米國メソジストの間で決定的な意見の相違」(一八三頁)が見られたこと、そして「南北戦争前の指導者はウエスレーであったが、南北戦争後はフレッチャーとなり、フレッチャーの著作が米國メソジストの神学的立場の第一次資料とされた」ことなどが紹介されています。あの学生たちの提起した問いに真摯に答えるには、この複雑な歴史過程を地道に掘り起こす必要があります。

注 「引用文は、読みやすくするために、句読点など、その一部に修正が加

えられています。」

- (1) ① 「経験主義のロックは、知識の起源を身体感覚に置き、その感覚証言を知覚することで観念が得られ、観念と知覚を同一視する情動的・心理学的認識論を主張したのです。理性的認識論ではなく、情動的・心理学的な認識論を知識の基本的性格としたのがロックの認識論の特徴でした。物質的世界は身体的五感で直接認識できると述べるロックにウエスレーも同意し、比論的に、霊的世界も霊的五感(霊的目、耳、触、舌、嗅覚の証言)で直接知ることができると言います。ウエスレーは、身体的五感と平行する霊的感覚の五感を取り上げ、この霊的感覚を、宗教世界の知識を得るのに適切な感覚とし、ここで与えられる霊的証言は理性からの推論などを不必要としたのです」(『めぐって』三三頁)。

② 「比論的」とは、哲学的に述べると、身体五感によるロックの認識論「アリストテレスの伝統」で与えられる物質世界と同じ性格の認識が、霊的五感によるマルブランシュの認識論「プラトンの伝統」で与えられるということです」(『めぐって』三四頁以下)。

- (2) ③ 「若きウエスレーは、マカリオスの英語訳の書物を一七三四年に読み、米国のジョージア滞在中、ドイツ敬虔主義者やハレの敬虔主義者たちと出会い、ドイツ語訳のマカリオスの書物を一七三六年七月三〇日と翌日に読みました。……マカリオスの神学は聖霊の神学、心の霊性と呼ばれます。……マカリオスの宗教的認識論はアリストテレスの伝統ではなく、ウエスレーと同じくプラトンの伝統なので、……(通常マカリオスはウエスレー等、当時の人々が考えていた四世紀エジプトのマカリオス「大マカリオスと呼ばれる」ではなく、五世紀シリアの修道士マカリオス「偽マカリオスと呼ばれる」でした)」(『めぐって』三八頁以下)。

① 「後期のウエスレーは、瞬間的の神の恵みと継続的の神の恵みの二重性、義認・聖化の瞬間性と、義認と聖化の継続性ととの二重性を展開した」(『メン』四一頁)。

② 「この聖霊による神の現臨と形成力という二重の神の恵み理解、すなわち、義認(愛される素晴らしさ)と聖化(愛する素晴らしさ)

の二重性、神の恵みの直接的・瞬間的出来事(神の恵みの啓示)と継続的・動的出来事(人間の主体的応答性)との二重性が、彼の神学の根幹なのであった」(『メン』四二頁)。

(3) ① 「神の主権性と人間の自由の両立を強く擁護する両親の影響も加わって、予定論は、ウエスレーが一七二五年以来一貫して同意できない考えであった」(『救済』一一〇頁)。

② 「正義と憐みからなる支配者としての神概念は、権威主義的君主、あるいは、暴君的君主のような性格の神ではなく、人間の自主性を尊重し、相手を強制しない、愛に満ちた家庭の親のような神であった」(『救済』一一八頁)。

③ 「抵抗可能な恵み理解に立った国教会と、ギリシャ教父から人間の自由・応答性を学ぶウエスレーは、当然の如く不可抗の恵みを否定し、無条件的選びと同様、万人救済説をも否定する。いずれの場合も、応答・救いが強制され、決定論的思考が支配するからである」(『救済』一一八頁以下)。

(4) ① 「要約すれば、以下のようになる。罪の奴隷としてこの世に誕生した人間は、先行の恩恵によって思考や意志、自由の諸機能が潜在的に回復され(先行の恩恵の第一の働き)、この諸機能によって救いへ導こうとされる神の更なる恵み(先行の恩恵の第二の働き)に応答・拒否し得る者とされている。……しかし彼にとつて、先行の恩恵の第一の働きの結果である諸機能の潜在的回復が文字通り応答する機能を果たすためには、神の恵みが不可欠であり、潜在的諸機能は……それ自体では何一つすることのできない機能、つまり全的に墮落している機能であった」(『救済』一〇五頁)。

② 「ウエスレーの先行の恩恵「の狙い」とは、義認前でも義認後でも、人間の主体性をいかに確保するのにかあった。彼は先行の恩恵で、プロテスタント的な信仰と良き業の二元論的対立を克服し、義認と聖化の相互性に徹した」(『メン』四九頁)。

(5) ① 「東方にとつて、創造時のアダムは、現実的な意味ではなく、潜在的な意味で完全であった。パラダイスのアダムは、いかなる成長・発展をも許容しない静的状態としての完全ではなく、むしろ無

垢な存在として、未熟なる存在から成熟したものへと成長・発展する人間として創造された。子供のような無垢と単純性であったアダムは、成長することが必要であった。「アダムは」「完成された完全」という静的に完結し、閉じられた存在ではなく、「完全に向かう完全」というダイナミックに開かれた存在として理解され、「神性・人性の参与」を通して、常に神の生命との交わりによって生き、栄光なる神との一致へと絶えることなく成長するべく創造されていた。神化とは、この参与によって神の生命と栄光に与ることである。勿論、このことは神と人間の汎神論的同一性（ホモウシオス）の確信を意味せず、神化の存在論的基盤は受肉論にあった。神が人間になつてくださったおかげで、人間の神に至る道が開かれたのだ。神化とは、この神性・人性の参与を可能ならしめた受肉者キリストへの確信を表し、「東方は」この参与によって人間の本性が徐々に神の道徳的像を回復し、愛が唯一の支配原理となる真の人間性になることを救い・贖いと捉えた」（『救済』四三頁以下）。

② 「ウェスレーは、アダムの完全 (Adamic perfection) を主張する点でプロテスタントの伝統に立つ。神が完全あるように、その像である人間の本性も完全である。彼は、一七三〇年の説教「神の像」で、神の像として創造されたアダムは、神のように霊的存在であり、神と類似する完全なる特性を備え、この特性は、不滅なる悟性、腐敗しない意志、完全なる自由であると言う。悟性は、あらゆる点で完全で、リアリティを明白に把握し、過ちを犯すことなく真理に従って正しく判断する。このアダムの完全なる理性の働きによって、神を含むすべての事柄が正しく把握され、善と悪の区別も可能となり、意志と自由はこの不滅なる悟性の指示に従って導かれる。このアダムの完全が神の不滅なる像そのものである……但し、この悟性・意志・自由の諸機能は、人間の内に所有・所与として本来的に備わっているのではなく、神との交わりにおいて、非創造的恵みとして機能していた。この神の栄光を輝かせていた完全なるアダムという概念を、ウェスレーは、「神の像」から始まり、晩年の「全被造物の解放 (The General Deliverance)」(一七八二)、「人間の墮落 (On

the Fall of Man)」(一七八二)に至る説教で主張した。アダムが完全であった理由は二つあった。第一は、人間が、神の生命・光・栄光などの神の本性に参与・応答できるため、第二が、神の本性的なかも特に神の愛に参与・応答できるためであった」（『救済』五一頁以下）。

③ 「人間が自然的神の像として創造された理由は、神が人間の内に留まり、人間も神の内に留まり、神との人格的結合に参与するためである。人間が、自由に、主体的に神的本性に参与できるように、神の人格の機能と類似する理性、意志、自由が備えられたのだ」（『救済』五二頁）。

④ 「悟性、意志、自由からなるウェスレーの人間理解得の特徴は、意志を、「理性の時代」と呼ばれる当時の支配的原理であった理性的に自己決定する人間の機能ではなく、むしろ感性的な情感 (affections) と同一視した点にあった。意志の本性的性格を、情感、情念 (passion)、情動 (emotion) との関係で理解した。意志とは、あらゆる種類の情動、情念、情感に基づいて自らを動かせる内的機能で、人間の選択や行動を真に決定づけるものは、理性的なものより、この情感的・情念的・情動的なもの、即ち、愛、喜び、平和、希望といった情感の本性 (affectional nature) 「である」とし、意志の本性的性格を情感と同一視した。これが、意志に関する初期から晩年に至る彼の定義であった (BE. 2: 409f, 439, 474f, 489, 4: 22, 294f, 311-3)。ウェスレーがなぜ情感の神秘主義、直接的・霊的体験としての信仰理解を強調したのかを我々は今良く理解できる。これら情感の主たるものは神の本性なる愛で、この愛という情感を原初のアダムは備えていた (BE. 2: 294)」（『救済』七四頁）。

⑤ 「この神の愛に由来する情感は、「キリスト教を真に構成する魂の性向 (disposition)」(BE. 1: 631) と呼ばれ、一時的性格のものではなく、持続する性向、習慣化し得る性向になって、神と隣人を愛する。この情感が習慣化するほどまでに成長する性向を、彼は気質 (temper) と呼ぶ」（『救済』七五頁）。

(6) 「神化とは、人間本性に付加された神的現実ではなく、非創造的恵

みである神的生命・本性・栄光に参与することである。従って神に義とされるために、注入された恵みによって自分のうちに造り出す状態に救いを見る功績 (merit) という概念も東方に「は」ない。また、プロテスタントに見られるキリストによる義の転嫁 (imputation) 、創造された恵みとして外在的に義が転嫁されるという概念もない。人間の所有の対象に決してならない非創造的恵みである神のエネルギーとの交わりに人間が開かれていることが、東方の人間論の土台である」(『救済』四九頁)。

(7)

① 「神に類似・一致することは、服従の倫理、義務の倫理より、根源的に神の恵みによって全く新たにされた心・魂の内的傾向の問題である。神を愛し、隣人を愛するということは、倫理的というよりは、神的生命・愛にみだされて、キリストのような愛に満ちた存在になること。その意味でイエスを模範とすることは、主体的・決断的なことより、愛の氣質を啓発する美德の問題であり、……」(『救済』一五四頁)。

② 「人間の創造目的は、神との交わりを通し、神の永遠なる生命を享受し、神の愛・聖・幸福・栄光にあずかることで、そのために御子が受肉した。キリストの神性と永遠性、栄光に人間があずかるためである」(『救済』一五五頁)。

③ 「実体概念を前提し、この両者の交わりは如何にして成立するかと問う西方の実存的思考に対し、存在の基本概念の交わりや神化を強調する東方は、キリストの神性・人性の区別より相互性を主張した」(『救済』一五二頁)。

④ 「『キリストの』三つの職務は、宗教改革以降広く用いられ、改革派・ルター派正統主義の標準となり、カトリックでも使用されたが、東方では一般的ではなかった」(『救済』一三二頁)。

⑤ 「ウエスレーの律法解釈の特徴は、国教会と同様、この第三の用法「人間本性更新への成長をもたらす律法」にあった (BE: 2: 15 ff. 60)。さらに彼は改革派と異なり、この第三用法の律法の性格を、命令、要求より、神の類似への変容、キリストとの存在的一致と捉えた。これは彼の律法が、東方と同様、美德の倫理で、義務や服従

の倫理ではないことと一致する。神の本性の愛を映し出す律法、神にある生命と同一の生命をもつ律法、この律法を完全に写す者としてのキリストの姿が、十三の山上の説教に描かれ、このキリストとの存在的一致・模倣が語られたのである」(『救済』一三三頁以下)。

⑥ 「原罪理解と同様、時期によって彼の贖罪理解の特徴がみられる。若き彼の関心は東方の古典説にあった」(『救済』一三七頁)。

⑦ 「プロテスタントの研究者たちの定説によれば、ウエスレーの基本的な立場はアンセルムスの満足説、あるいは宗教改革者たちの刑罰代償説であったという」(『救済』一二八頁)。

⑧ 「キリストの十字架の死は、傷つけられた神に支払われた犠牲であると同時に、愛する神から人間に差し込まれた無償の赦しでもある。ウエスレーの関心は、神の怒りと共に、創造の初めより人間を救うと決意された神の愛にあった」(『救済』一三二頁)。

⑨ 「地獄や審判に言及する際、彼はそこにある牙を抜いて、神の恵みへの応答を、恐怖からではなく、愛され・赦されている者として応答するように語り (BE: 21: 368, 22: 255, 304f, 429)、後期になるとこの傾向は更に顕著になった」(『救済』一三一頁)。

⑩ 「彼の神学の特徴が関係性に基づくダイナミズムにあるとすれば、彼の強調する贖罪論とは、義認と聖化・完全の二重性、しかも個人「的」敬虔主義的、現在の次元での救いと、共同体的・社会的、終末的次元をも含む宇宙的救済の二重性である」(『救済』一三二頁)。